

子どもと昔話のかかわりに関する研究

—— 語り聞かせ・読み聞かせと映像メディア ——

金子省子

(保育学研究室)

越智奈緒美

(上朝小学校)

(平成7年4月28日受理)

1. 緒言

口承文芸としての民話¹⁾と再話との関係については、再話と語り手との相互作用や作家の個性をどう考えるのかなど従来意見が分かれるところである²⁾。さらに、子どもの発達環境という観点からは、子ども向け絵本などのかかわりやおとなの働きかけについての検討が重要な課題となる。

子どもを読者として明確に意識した絵本の出版は、延宝期の赤本『初春のいわひ』に確認されるという³⁾。以後絵や文章による児童文化財は定着をみせてきた。そして、出版された絵本や教科書を通して、昔話の変容を捉え、時代の子ども観を捉える試みがあるように、語られ伝えられる場も話も、時代による変化と無縁ではない^{4) 5) 6)}。民俗社会の口承によるものから大きく隔たり、新たな媒体によるものも含みここでは、現在「昔話」と一般に呼称されるものを対象としてみていくことにしたい。

子どもたちが今日一般に昔話と呼ばれるものに触れる場としては、家庭、保育所・幼稚園、地域の図書館・文庫などがある。戦後の絵本出版に昔話絵本の位置は決して小さいものではなかったが、現在では、訓練された語り手⁷⁾、読み手や昔話絵本に加え、映像メディアも登場している。テレビゲームに昔話の人物名がつく現状である。

多様な「お話」が刻々生みだされるなかで、テレビをあたりまえのものとして育った親世代は、自身の触れてきた昔話と子どもとのかかわりについてどのように考えているのか。また、実際の子どもの生活のなかでどのような出会いやかかわりがあるのだろうか。

今各地で語りの会などの活動が行われているが、そこで活字としての再話が用いられることも多い。絵本の世界でもいわゆる「テレビ絵本」が登場し、テレビから活字メディアへという新たな方向性もみられる。このような状況のもとで、「昔話本来の特質や、子どもにとっての意味から考えて、昔話は基本的には語られてこそ生きる」⁸⁾とし、安易な昔話絵本の出版を批判するものもある。

ストーリーや絵・文章などの分析、子どもからの働きかけとの相互作用や子どもをひきつけるものは何かを明らかにすることが重要なのはいうまでもない。子育ての過程で、ひとりひとりの子どもとの関係のなかから、お話と子どもとのかかわりを捉える実践研究が教えるものも多い^{9) 10)}。集団保育の場での子どもと絵本とのかかわりを保育の流れの中で位置づけた研究を

はじめ、絵本と読み聞かせ、語り聞かせの手引書なども数多く出版されている。

しかし、児童文化に深い関心をもつ人々の意識や子どもとのかかわりについての指摘が、多くの子どもとおとなのものとしてどれ程位置づいているだろうか。子どもは単なる消極的な受け手ではないが、幼児期の児童文化財との出会いについては、親や保育者の果たす役割はきわめて大きい。本稿では、変容しつつ今日に至った昔話を取り上げ、子どもと昔話のかかわりにおいて親が担っている役割を明らかにすることで、児童文化財とおとなと子どもの関係状況を捉える手がかりとしたい。質問紙調査をもとに、出会いの場や媒体、かかわりの状況を、特に母親のかかわりや意識を中心に捉え、家族形態、母親の考えや母親の幼い頃の経験の影響などについて考察する。

2. 調査方法

幼児の母親を対象とした質問紙調査をもとに、分析・考察を行った。

調査時期は、1991年11月から12月である。

調査対象は、愛媛県の保育所・幼稚園計12箇所の5歳児の母親で、保育所・幼稚園を介して配布、回収を行っている。

有効回収数は、260（有効回収率87.8%）であった。

質問は、日本の昔話に限定し、次のような内容である。

- 1) 母親による昔話の語り聞かせ・読み聞かせの頻度
- 2) 昔話の語り聞かせを行う人
- 3) 母親のお話づくり（語り聞かせ）の頻度
- 4) 子ども向け絵本・本の総数と日本の昔話の絵本・本の冊数
- 5) テレビ番組『まんが日本昔話』の視聴
- 6) マンガ、ビデオ、レコード、テレビゲームなどの所有状況
- 7) 子どもと昔話のかかわりや6つの昔話についての母親の考え
- 8) 子どもと昔話のかかわりの実際と母親の希望
- 9) 母親の幼い頃の経験と語り聞かせの自信

3. 調査対象の属性

居住地域、家族形態、子ども数、母親の年齢、母親の学歴、母親の就労状況については、表1に示した通りである。

4. 結果・考察

(1) 子どもと昔話のかかわり

1) 母親による昔話の語り聞かせ・読み聞かせの頻度

日本の昔話についての語り聞かせと読み聞かせを、母親がどの程度行ってきたかを、頻度で捉えた。子どもにより、またお話によって、語り聞かせや読み聞かせのありようは多様であり得るが、一般に子どもの行動半径が広がる3歳頃を1つの区切りとして時期を区分して質問し

表1 調査対象の属性

居住地	市部	134(51.5)	母親の学歴	中学卒	9(3.5)
	郡部	126(48.5)		高校卒	123(47.3)
子ども数	1人	95(36.5)	専門学校・短大卒	98(37.7)	
	2人以上	152(58.5)	4年制大学卒	24(9.2)	
	無回答	13(5.0)	無回答	6(2.3)	
家族形態	三世代同居	102(39.2)	母親の就労状況	フルタイム勤務	47(18.1)
	核家族	154(59.3)		パートタイム勤務	76(29.2)
	無回答	4(1.5)		内職	26(10.0)
母親の年齢	25～29歳	32(12.3)		自営業	49(18.8)
	30～34歳	104(40.0)		農林水産業	6(2.3)
	35～40歳	81(31.1)		無職	37(14.2)
	40～44歳	25(9.6)	その他	11(4.2)	
	その他	2(0.8)	無回答	8(3.1)	
	無回答	16(6.2)			

N=260, () 内は%

ている。

図1のように、語り聞かせを「よくした」という母親は3歳前では、1割程度にすぎず、3歳以降ではさらに半分近くに減少している。どちらの時期も最も多いのは、「たまにした」という回答で、「たまに」と「時々」で6割前後を占めた。

読み聞かせについては「よくした」という母親は3歳前が3割弱で、3歳以降で2割程度へと減少する。どの時期も最も多いのは「時々」で、「時々」と「たまに」を合わせると6割前後を占めた(図2)。

「よくした」を頻度の高い群とし、「時々」及び「たまに」を中間群、「1, 2度」及び「全くない」を頻度の低い群として、クロス集計を行った。

3歳前の語り聞かせの頻度と3歳以降の頻度との関係($\chi^2=144.38$, $df=4$, $p<.0001$)及び3歳前の読み聞かせの頻度と3歳以降の読み聞かせの頻度との関係($\chi^2=123.89$, $df=4$, $p<.0001$)でも有意差がみられた。どちらの場合も、3歳前

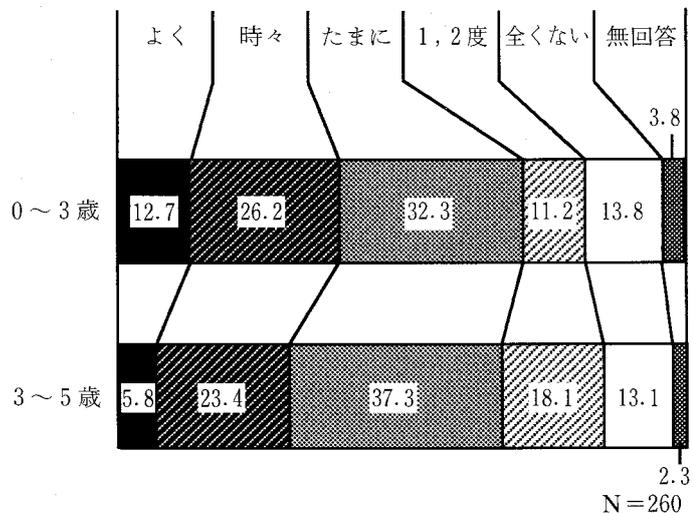


図1 母親による語り聞かせの頻度 (%)

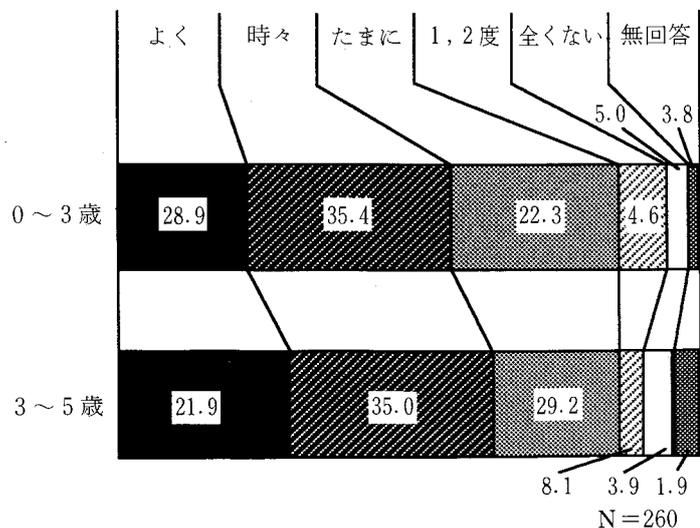


図2 母親による読み聞かせの頻度 (%)

に頻度が高い母親は3歳以降も高・中間群が高い割合を占め、低い場合は、中間もしくは低い群が多くなっていた。頻度が一致する母親が最も多く、ついで頻度がより低くなる母親が多くなっていた。

3歳前の語り聞かせの頻度と読み聞かせの頻度との関係を見ると、語り聞かせの頻度が高い群の母親は読み聞かせもよく行っており、語り聞かせの頻度が低い場合は、読み聞かせも中間・低い群がより多い ($\chi^2=81.65$, $df=4$, $p<.0001$)。また、このような傾向は、3歳以降でも同様であった ($\chi^2=59.70$, $df=4$, $p<.0001$, 表2参照)。全体に頻度は一致するものが最も多いが、読み聞かせの方がより頻度の高い群に位置づく母親が、より低い群となる母親よりも多い。

2) 昔話の語り聞かせを行う人

保育所・幼稚園などを除き、家庭や地域で、昔話の語り聞かせを誰が行っているかをみた。母親以外にはいないとの回答が3割近い。母親以外として挙げられた人では、図3のように、祖父母を半数近くが挙げており、父親は全体の4分の1程度である。

祖父母及び地域の老人を挙げたかどうかを、家族形態別にみると、三世代同居の家族で60.8%,核家族が41.6%であった。このように、同居している老人が語り手に必ずしもなっていないが、三世代同居の方が挙げられた割合が高い ($\chi^2=9.07$, $df=1$, $p<.01$)。また、母親以外に家庭・地域で語り手がいる割合も、前者で78.4%,後者で66.9%と有意差がみられた ($\chi^2=4.01$, $df=1$, $p<.05$)。同居の祖父母がいないことを補うような、他の語り手が十分には機能していないことがわかる。

前項で、どの時期にも語り聞かせの頻度が低い母親で、かつここで他の人も挙げられていない場合が全体の8.5%みられ、家庭や地域では語り聞かせにほとんど触れることのない子どもが1割近いことがわかる。

3) 母親のお話づくり (語り聞かせ) の頻度

語り聞かせには、読み聞かせとは異なる「間」があるといわれる。昔話を語り聞かせるにあたっては、ストーリーそのものの正確な記憶が、おとなと子どもとのかかわりを創り出すわけではない。親子の読み聞かせの場合も子どもとのやりとりの中でその親子だけのオリジナルのお話ができる可能性もある。しかし、語り聞かせでは、特にその可能性や自由度は高いと考えられる。ここでは、語るというかかわり自体について、母親自身が何らかのお話をつくり語ってきたかについてみた。

図4のように、全くしていないという回答が36.2%で、昔話の語り聞かせよりも頻度としては、低い傾向がみられる。

3歳前の語り聞かせの頻度との関係を見ると、お話をつくり語ることの頻度の高い母親では、昔話の語り聞かせの頻度も高・中間群になる傾向がみられ、低い場合には昔話の頻度も中間も

表2 語り聞かせと読み聞かせとの関係 (3~5歳)

		読み聞かせ			計
		高	中	低	
語り聞かせ	高	12 (80.0)	3 (20.2)	0 (0)	15 (100)
	中	29 (18.5)	120 (76.4)	8 (5.1)	157 (100)
	低	15 (18.8)	42 (52.5)	23 (28.7)	80 (100)

$\chi^2=59.70$, $df=4$, $p<.0001$

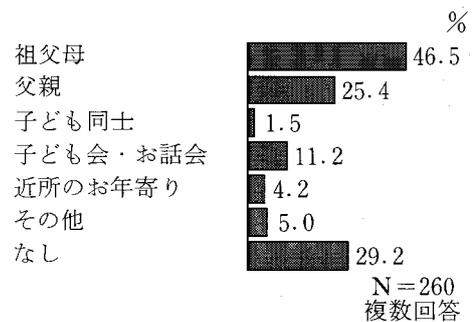


図3 母親以外の語り手 (家庭・地域)

しくは低い傾向がみられた ($\chi^2 = 75.53, df = 4, p < .0001$)。3歳以降でも同様の傾向がみられた ($\chi^2 = 64.67, df = 4, p < .0001$, 表3参照)。頻度からみる限り、全体としては、昔話の語り聞かせの方が、自分でお話づくりをして語るより活発である。

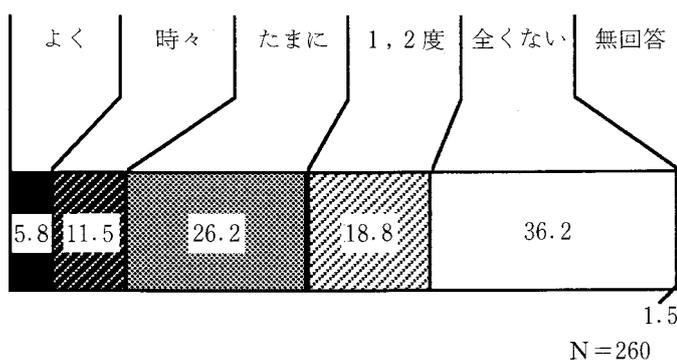


図4 母親のお話づくり (語り聞かせ) の頻度 (%)

4) 子ども向け絵本・本の総数と日本の昔話の絵本・本の冊数

家庭内の子ども向け絵本・本と日本の昔話の絵本・本の所有数を調べた。

全体の平均が70.5冊で、日本の昔話は、最多の51冊から全く持っていない場合まで平均17.3冊であった。これは全体の約4分の1である。総数と日本の昔話の所有数との間には正の相関がみられた ($r = 0.53, p < .01$)。

所有している昔話 (自由記述) としては、78種類が挙げられ、最も多いものから10位では、「桃太郎」、ついで、「さるかに合戦」、「浦島太郎」「かぐや姫」「花咲かじいさん」「かさ地蔵」「一寸法師」「かちかち山」「鶴の恩返し」「金太郎」の順となっていた (題名は最も多いものに統一した)。いわゆる五大昔話が上位に含まれている。

5) テレビ番組『まんが日本昔話』の視聴

「大変よい番組」と考えている母親は64.2%、「普通のアニメよりはよい」が28.1%で、かなり好意的な捉えられ方をしていた。一方視聴状況では、「毎週」および「ほぼ毎週」見ている子どもが3割程度だった。地域により視聴できなかつたり、長期の休みの特集に変更された時期もあり、視聴状況を正確に捉えられなかった。

6) マンガ、ビデオ、レコード、テレビゲームなどの所有状況

家庭にある日本の昔話に関する物の所有状況を絵本・本以外でみた (図5)。特にないという回答が4割程度みられた一方で、レコードやカセットテープのような耳からの昔話以上に、昔話のビデオテープが家庭にあることが捉えられる。

昔話絵本・本の所有と「ビデオあるいはカセットテープあるいはレコード」の所有の有無との有意な関係はみられず、活字とその他の媒体の所有との関係は特にみられなかった。

7) 子どもと昔話のかかわり及び6つの昔話についての母親の考え

子どもと昔話のかかわりについての母親の考えを、「多くの絵本のなかで、昔話絵本についてはどのように与えたいか」という質問から捉えた。「昔話絵本を他の絵本以上に与えたい」

表3 お話づくりと語り聞かせ

		語り聞かせ (3~5歳)			計
		高	中	低	
お話づくり	高	5 (33.3)	10 (66.7)	0 (0)	15 (100)
	中	8 (8.5)	76 (80.9)	10 (10.6)	94 (100)
	低	2 (1.4)	70 (49.7)	69 (48.9)	141 (100)

$\chi^2 = 64.67, df = 4, p < .0001$

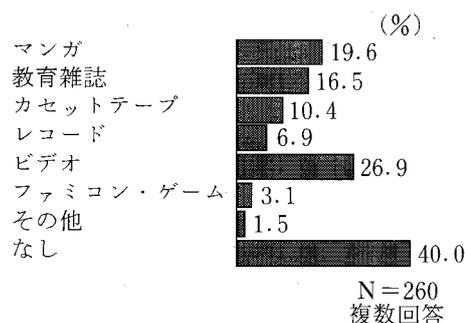


図5 絵本・本以外の物の所有状況

母親は、6.5%と少数派で、84.2%が「他と共に与えたい」と回答した。

さらに、「桃太郎」「さるかに合戦」「花咲かじいさん」「かぐや姫」「かさ地蔵」「浦島太郎」の6つの昔話を取り上げ、子どもに伝えることについての肯定・否定意見とその理由について質問した（a 人情味がある，b 残酷な場面がある，c 幻想的な美しさがある，d 人間のたくましさ，強さがある，e 人間の欲深さ，弱さがある，f 物悲しさがある，g 楽しさ明るさがある，h 勧善懲悪，i 痛快，j 荒唐無稽，k 奇想天外，l 昔の人の暮らしぶりがわかる，m その他，から主なものを1つ選択回答とした）。

6話とも、「子どもに伝えたい」が全体の4分の3以上を占めた。最も肯定的に捉えられた割合の高かった「桃太郎」（肯定87.7%，否定3.1%，どちらでもない9.3%）の肯定理由では、「たくましさ，強さ」が最も多い。最も否定意見の多かった「さるかに合戦」（肯定75.0%，否定14.2%，どちらでもない10.8%）

では、「残酷さ」が否定理由の大半を占めた。

8) 子どもと昔話のかかわりと母親の希望

前項まで、昔話に関する物やおとなのかかわりを捉えてきた。ここでは、子どもと昔話のかかわりの全体像とこれについての母親の考えをみていく。

子どもと昔話のかかわりのみられるものについて（複数回答）全て挙げたのが図6である。最も多いのがテレビ・ビデオで8割以上が挙げている。ビデオのレンタルが普及していることが背景として考えられる。また、『まんが日本昔話』の他に『一休さん』などの番組を昔話と考えるの結果かもしれない。また、一人読みが読み聞かせにつぐ割合で挙げられており、教育雑誌等も合わせると活字メディアの位置はかなり高いものにみえる。

そこで、これらのかかわりの内、最も多くかかわっていると母親が捉えたものを分析した。母親が最も望ましいと考えるかかわりについても、合わせて図7に示した。

実際のかかわりでは、幼稚園や保育所での語り聞かせや読み聞かせを

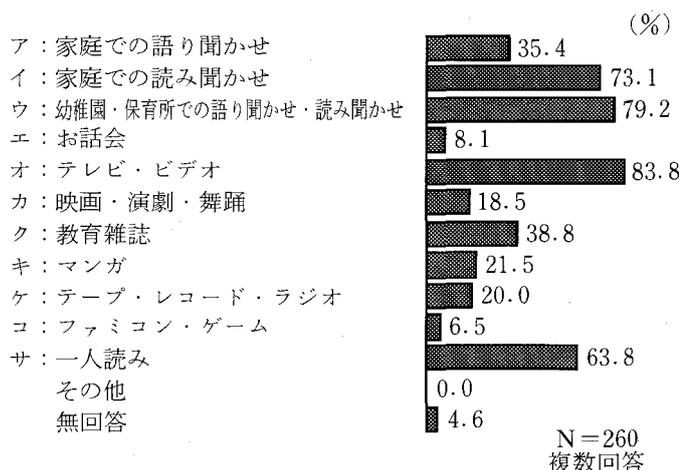


図6 子どもと昔話のかかわり

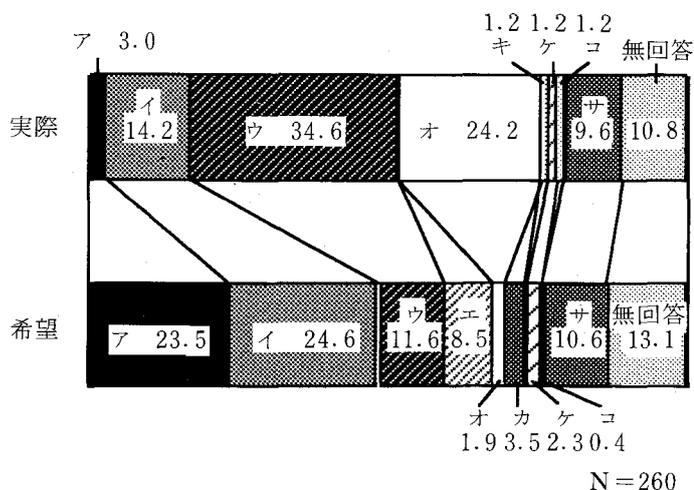


図7 子どもと昔話のかかわり (%)

- ア: 家庭での語り聞かせ
- イ: 家庭での読み聞かせ
- ウ: 幼稚園・保育所での語り聞かせ・読み聞かせ
- エ: お話会
- オ: テレビ・ビデオ
- カ: 映画・演劇・舞踊
- キ: マンガ
- ク: 教育雑誌
- ケ: テープ・レコード・ラジオ
- コ: ファミコン・ゲーム
- サ: 一人読み

第一に挙げるものが最も多く、家庭での語り聞かせと読み聞かせを合わせても、テレビ・ビデオに及ばない。一人読みを家庭でのかかわりに加えると映像メディアとの位置は逆転するが、映像メディアと施設・家庭でのおとなのかかわりとの比較で見れば、幼稚園・保育所での語り聞かせや読み聞かせ>テレビ・ビデオ>家庭での語り聞かせや読み聞かせ、という結果となる。一方、母親の望ましいと思うかかわりでは、家庭での語り聞かせが最も多く、幼稚園や保育所以上に、家庭での語り聞かせや読み聞かせのようなかかわりを望ましいと考えている。

以上各項目ごとにみてきた。

母親による昔話の語り聞かせは、読み聞かせ以上には行われていない。一部を除き乳幼児期全般についてよく行われているとはいえないようだ。そして、語るという行為自体が少ないということが指摘される。また、語り聞かせ・読み聞かせの3歳以降での減少傾向は、子どもの遊びの中で、お話の時間の占める割合が減少していることや、保育所・幼稚園の入園、一人読みのあらわれなどによる影響も考えられる。

語り手として、父親に比べれば祖父母が役割を担っていることが捉えられたが、同居していても必ずしも語り手にはなっていない。また、核家族で三世同居よりも家庭・地域の語り手が少なく、祖父母が同居していないことを補うほどの他の語り手の存在や活動が十分でないことをあらわしている。

昔話は、母親にはほぼ肯定的に受け入れられ、子どもに伝えたいものと位置づけられており、絵本や本の購入もされている場合が多い。しかし、一方で特別な位置づけを与えられているわけではなく、否定的な捉えられ方をする昔話もある。

家庭における子どもと昔話の出会いやかかわりは、映像メディアを抜きに考えられない状況で、新しい伝承は、保育者による幼稚園や保育所でのそれに大きく依存しているようである。ただ、母親たちはこの状況を肯定しているわけではなく、家庭での語り聞かせや読み聞かせによりかかわるのが望ましいと考えていることがわかる。

(2) 子どもと昔話のかかわりに影響する要因

1) 属性との関係

母親による昔話の語り聞かせ・読み聞かせの頻度、子どもと昔話のかかわりについての母親の考え及び子どもと昔話のかかわりと母親の希望について、クロス集計により属性の影響を分析した。属性として、居住地域、家族形態、子ども数、母親の学歴(4年制大学卒業の有無)、母親の就労状況(有職・無職)をとりあげた。 χ^2 検定の結果有意差のみられたものについて述べる。

①母親による昔話の語り聞かせ・読み聞かせの頻度について

前項でみたように、家族形態は母親以外の語り手の有無に影響していたが、属性と母親のかかわりとの有意な関係はみられなかった。

②昔話についての母親の考え(他と比較しての位置づけ)について

特に属性との関係がみられない。

③子どもと昔話のかかわりについての実際と母親の希望

家庭での語り聞かせを挙げた母親は、無職者では59.5%を占め、有職の母親では、33.7%にすぎない($\chi^2=8.89$, $df=1$, $p<.01$)。①のように、頻度としては明らかな相違はみられなかった。

一方最もよく行われているものとして、家庭での読み聞かせを最も多く挙げ、テレビが13.6%とより少ないのは、高学歴の母親だった ($\chi^2=11.33, df=4, p<.05$)。

属性と母親が最も望ましいと考えるかかわりとの間の有意な関係はみられなかった。

2) 母親の経験との関係

①母親の経験

母親の記憶から、母親自身の幼い頃の昔話とのかかわりを捉えた (図8)。

幼い頃、家庭で昔話の語り聞かせをしてもらったことがある母親は、全体の48.8%で、これは読み聞かせの経験よりも高い割合である。保育所や幼稚園での語り聞かせ・読み聞かせの記憶については、63.5%がも

家庭での語り聞かせ
家庭での読み聞かせ
近所のお年寄りによる語り聞かせ
幼稚園・保育所での語り聞かせ・読み聞かせ
公民館・図書館などでの語り聞かせ・読み聞かせ
その他
経験がない
記憶がない
無回答

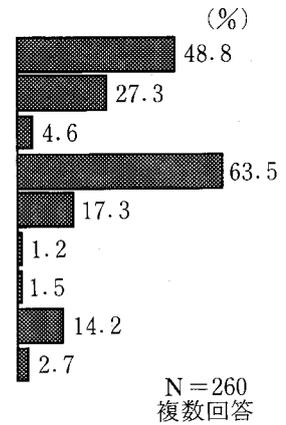


図8 母親の経験

っている。これは、あくまで記憶であり、また子どもについての設問と選択肢も完全に同一ではないが、子どもたちのかかわりの実際と比較すると、子ども世代で、家庭での読み聞かせの割合と保育所・幼稚園での語り聞かせ・読み聞かせが伸び、家庭での語り聞かせが減少していることがわかる。

さらに、7) で取り上げた6つの昔話について、母親が語れるかどうかについてみた (選択肢は「何も見ないで人に話せる」「話す自信はないがほぼ覚えている」「あまり覚えていない」)。人に語れるという母親の割合は、最も高い「桃太郎」の68.5%から最も低い「かさ地蔵」の33.1%までばらつきがみられた。

これらの6つの昔話を語れるかどうかと母親自身の幼い頃の経験との関係を見るため、語り聞かせをしてもらった経験の有無と6つの昔話の語り聞かせが可能かどうかとのクロス集計を行った。「花咲かじいさん」と「かさ地蔵」では、家庭で語り聞かせをしてもらった経験をもつと回答した母親で「何も見ないで人に話せる」という回答が最も多く、経験がない場合には、「話す自信はないがほぼ覚えている」が最も多かった (「花咲かじいさん」: $\chi^2=10.18, df=2, p<.01$; 「かさ地蔵」: $\chi^2=8.43, df=2, p<.05$)。

②母親の経験と母親自身の昔話の語り聞かせ・読み聞かせについて

3歳以降の語り聞かせの頻度、読み聞かせの頻度との関係を表4に示した。

表4 母親の経験の有無と語り聞かせ・読み聞かせとの関係

		語り聞かせ (3~5歳)				読み聞かせ (3~5歳)			
		高	中	低	計	高	中	低	計
母親の語り聞かせの経験	有	13 (10.3)	79 (62.7)	34 (27.0)	126 (100)	41 (32.8)	77 (61.6)	7 (5.6)	125 (100)
	無	2 (1.6)	75 (61.5)	45 (36.9)	122 (100)	16 (12.9)	87 (70.2)	21 (16.9)	124 (100)

$\chi^2=9.64, df=2, p<.01$

$\chi^2=18.57, df=2, p<.001$

家庭で昔話の語り聞かせをしてもらった経験をもっていると回答した母親は、そうでない場合に比べ、3歳前及び以降の語り聞かせ、読み聞かせ、お話づくりの頻度すべての項目で、経験をもたない母親に比べより高い頻度を示した(3歳前語り聞かせ： $\chi^2=8.97$, $df=2$, $p<.05$ ；3歳以降語り聞かせ： $\chi^2=9.64$, $df=2$, $p<.01$ ；3歳前読み聞かせ： $\chi^2=15.38$, $df=2$, $p<.001$ ；3歳以降読み聞かせ： $\chi^2=18.57$, $df=2$, $p<.001$ ；お話づくり： $\chi^2=9.44$, $df=2$, $p<.01$)。

このように、母親の幼い頃の語り聞かせをしてもらった経験の有無は、昔話の語り聞かせやお話をつくって語り聞かせることに影響しているだけでなく、読み聞かせの頻度にも影響していた。

5. 結 語

家庭にある絵本・本やビデオという物の側面からも、また母親からみた昔話への肯定的な見方からも、子どもが家庭で昔話と出会う機会は少なくないと考えられる。母親以外の家族では、父親と比較し、祖父母がより多く語り手として位置づいている。

母親たちは、家庭で昔話の語り聞かせをしてもらった記憶を、読み聞かせ以上にもっていた。しかし、今、昔話と彼女たちの子どもとのかかわりにおいては、読み聞かせがより大きな位置を占めている。さらに、子どもと昔話のかかわりの全体状況から、映像メディアの定着がみられた。また、幼稚園・保育所の担っている役割は大きく、これらの施設が新たな伝承の場として位置づいていることが捉えられた。このように、家庭での昔話の語り聞かせ・読み聞かせの位置は相対的に高いものとはいえない。

母親自身が今の状況を必ずしも望ましいとは考えていないとすれば、何らかの支援が必要であろうし、母親のみの問題ではない。今回の調査は、母親側からみたかかわりの把握に基づくものである。子どもの個性や子ども自身が創り出すかかわりの側面を忘れてはならないし、お話を介したやりとりだけが、親子のかかわりではないだろう。

しかし、このような支援の前提として、家庭・地域でほとんど語り聞かせに触れることのない一部の子どもが存在が捉えられたことや、母親自身の幼い頃の経験や就労状況、家族形態など親を中心とした要因が及ぼす影響が捉えられた。

テレビアニメやビデオの場合には、ストーリーが展開される空間に、必ずしもおとながいなくてもかまわない。映像は、子どもの反応や読み手と聞き手の作り出す「間」とは関係なく展開される。中断・停止・再生が、機械の操作により行われる。昔話という口承を起点とするものが、口承とは全く異質なかかわりを求めるこのようなメディアと結びついていることをどうみていくのか。母親世代には、幼い頃の語り聞かせの記憶が多く刻まれていた。多様な絵本の出版を背景に子どもたちには、読み聞かせの記憶が残り、さらに次世代には一層映像メディアが大きな位置を占めることになるのだろうか。

我々はもはや絵本の特質と各絵本の特徴をふまえ、読み聞かせの可能性を学習によって、拡大することを通してしか、語りへとたどりつけないのだろうか。いずれにしても、こうした模索なしに、映像メディアへの視座は得られないだろう。

〈注〉

- 1) 昔話や伝説、世間話などの総称として用いている。
- 2) 吉沢和夫「民話の伝承と再話」, 日本児童文学者協会, 日本児童文学, 第37巻第2号, 6-15, 1991
- 3) 瀬田貞二『落穂ひろいー日本の子ども文化をめぐる人びと・上巻』, 福音館書店, 1982
- 4) 唐澤富太郎『明治百年の児童史』, 講談社, 1968
- 5) 鳥越信『桃太郎の運命』, 日本放送出版協会, 1983
- 6) 中内敏夫『教材「桃太郎」話の心性史』, 産育と教育の社会史編集委員会編『学校のない社会・学校のある社会』, 新評論, 193-225, 1983
- 7) ここでは、「語り爺さ」や「語り婆さ」のように限定せず、伝え手として広義に用いている。
- 8) 松岡享子『昔話絵本を考える』, 日本エディタースクール, 124, 1985
- 9) 木下逸枝『乳幼児の成長発達と絵本』, 高文堂出版, 1979
- 10) 上野泰子「子育ての中の昔話ー成長するおはなし」, お茶の水女子大学児童文化研究室, 舞々, 第15巻, 57-61, 1994